



ピクタインダカン

(おさみがりにぼし)

第18号

発行日 2018年10月20日

発行人 矢代 しず

秋田市御野塩7-1-29-305

満天星

一本の満天星が
まんでんせい*

板塀に寄りすがるように立っている
無造作に伸びた枝が
炎えさかっている

昨年まで 満天星の赤を愛でた人は
もういない

時の息吹は跡絶え
生家は青緑に閉ざされている

もはや仕舞いは避けられない
やがて記憶も遠くなり
白い風が吹きすすぶだろう

一本の満天星は
かなしみの空に
詩のあかりを点す

*ドウダンツツジのこと

濁黒 (KURO) VII

*

わたしの心に

刻まれた

傷は

かなしさを秘めたまま

冷たく沈む暗渠のように

肉のなかで

翳を深め

うねっている

逃げ道のない

微光さえも見えない

深い溝

心の底では

震えるようにうごめく濁黒

鋭く尖った角で

薄い魂の膚を突く

えぐられた魂

かがみこんだ意志

拒絶できない濁黒

わたしは どうして

時間の閉鎖を解き

未来に顔を上げることができないのか

なぜ わたしは

完治がなすまばゆい未来に

理想を重ねるのか

わたしのなかの

かなしい水は

いつまで経つても
光をみない

*

心のなかを描くと
じくじくと膿が出て
とまらない

*

まだ
濁黒は生きている
わたしも生きている
だから
たたかいは終わらない

*

魂の傷は決して癒えない
ことを悟った
恢復はできない
後遺症を背負って生きるしかない

*

後遺症と
うまく折り合いをつけて
必ず
わたしは回生する

*

回生を強く意識したとき
激しい渴きを覚える
濁黒の存在は消えない
が
魂は変われる
きつと
ひるまない
強いわたしになれる

*

内からわき上がってくる
魂のことばは
詩のマグマ

*

空、山、木、草、石
すべてに魂がある
自然から
人生を学ぶわたしも
自然の一部

*

いま
わたしには分かる

長いあいだ
夢のなかに棲んでいた龍が
事故後
一度もあらわれてこない理由を

悲劇の直後

*

強烈な痛みを

ことばで発するまで

十六年

わたしには必要だった

長い歲月

*

外へ表出したことばが

石の魂をひらいていく

そのとき

わたしは

新しいわたしと出会う

*

沈黙を破り

真実の詩を書くことで

みずからが救われる

闇から脱出する

気骨あるわたしでありたい

*

「真実は一つ」

信念を貫き通して

勝ちとつた正義

これが

わたしの芯

*

芯が立ちあがってくる

現状を引き受ける覚悟ができてくる

完治しない

前には戻れない

だが

魂は生まれかわれる

腹をくくると

あたらしい自分に出会える

*

210mmと148mmの四角い

ことばの庭

ピットインダウン

わたしがわたしでいられる

トポス

ことばの蕾を胸に

香りたつことばの花を

未来へ――

*

わたしの内に入りくる

見えないものに

抗議する

わたしの傍らにうねりくる

聞こえないものを

拒否する

複雑で黒いかたちの

ふかいものに

吠えかかる

濁黒に占められたままのわたしを
解放するために
途方もなく強い意志で
立ちむかう

*

わたしは
詩を書くことで
生きるエネルギーを生み出した

きつと

わたしは
あたらしくなる

*

わたしは閉鎖された時を越えて
きらめく星のように

輝く
うたう風のように
ひかりの言葉をまとう

*

苦しいなげきの混沌から
一条のあたらしい光がさし
重い心の蓋がすこしあいた

【詩の勉強会】

☆アンケートより

去る九月三十日（日）、あきた文学資料館において、「第四回 ピッタの会」を開催した。
成田豊人氏をコーディネーターに、田口映氏、十田撓子氏の県内在住三詩人による鼎談を行った。

メインテーマは「今、詩を書く事とは」。

参加者は講師を入れて二十名。内、はじめての参加者は五名であった。

- ① 「ピッタの会」の説明
- ② 講師紹介
- ③ 鼎談
- ④ 質疑応答

・ 十田さんと田口さんの詩に対する思いや情熱を知り、参考になりました。こどもたちに、いじめや自殺が蔓延しています。うつ屈した思いを、詩や言葉に表現することで少しでも減らすことができるのではないのでしょうか。

・ ゆたかな内容が沢山あって、学習になりました。新しい方がいらしていて、素晴らしいと思いました。田口さんの、自分の立場に立って詩を書きたい…ということばは、大切だと思いました。十田さんのお話はとても高い深味を感じます。

・ たいへん刺激になり、勉強になりました。成田さんのおふたりの詩に対してのひき出し方がお上手でスムーズにたのしめました。心の

奥の細い部分にふれられてよかったです。共感、とてもありました。

・回を重ねるごとに盛会かと。みなさんにとっていい機会と思いました。勉強になりました。

(内容よりはこうした時間に)

・貴重な話で有りました。少しでも学習して書いてみたいと思います。

・講師のお話を聞けただけでも、来てよかったです。詩とは、何か？ 常日頃考えていることです。

・初めて参加させていただき、大変楽しく勉強させていただきました。詩を書く方たちと触れ合いを持ってましたこと、感謝いたしております。

・講師の先生たちの詩への強い想い、言葉への思いを感じました。詩自体、言葉ではありませんが、大切にすることが故の悩み、迷いを知ることができました。詩を参加者皆で朗読することで、ひとつの詩、言の葉の連なりに各自の思いを感じました。様々な題材で作られる皆さんの詩は、感動はもちろんですが、今の私に穏やかな瞬時を得ました。若い人も、若者のもっている“自分の言葉”で表現している資料を読み、言葉を疎かにはしていないことを見出すことができ“日本語”もまだまだ生きていることを嬉しく思いました。難解なところもありましたが、勉強になりました。

・緊張感のある会でした。土・日など学生の参加しやすい日程であれば、参加者も期待出来るかと思えます。ネットなど何らかの形で作品を発表する手段が確立してしまっている今、足を運んで世代の異なる人たちの許へ出掛け

ることは、大人が思うより大変なことでもあ
ると思います。あきらめず、しつこくしすぎ
ず、繰り返し続けることが一番だと思えます。

・ 風土と詩についてももう少し深めたかったです。
自分なりに考えていくしかないのかナ、と思
っています。

・ 十田さん、田口さんの話のなから、詩に対
するしんしな姿勢、奥深いことばの源泉にさ
かのぼっていく鮭のように、なにもものかに誘
導されているたのしさを覚えました。

・ 三人の方々のお話は難しい部分も多く、浅学
の身にとっては理解できずにいることが申し
訳ないのですが、真剣に詩と向き合い、詩に
対する思いにふれることができて、とても有
意義な時間でした。

・ 詩を書くにあたり、聞いてよかったです。



【あとがき】

今回ははじめての企画だった鼎談は、メインテーマにそって話が展開された。成田氏の見事なコーディネートで、田口氏・十田氏の独自の詩の世界が引きだされた。知性がにじみでる講師の話は、参加者に新鮮な魅力を与えたと思われる。

*

「濁黒」は、今号で最終回を迎えた。12号から18号までの作品数は143編。飽和したカオスの、魂の裂け目からにじみ出てくる濁黒。心の襞に巣くいつづける黒い記憶をすっかり吐きださされたかといえ、NOと言わざるをえない。

しかし、社会学者の鶴見和子の『回生を生きる』と出会って、新しい生き方を与えられた。後遺症

はどうにもならないが、魂は鍛えることができる。精神的にどれだけの立ち直りの力をもっているか、プラスの思考を引きだす潜在能力をもっているかで、新しく魂を獲得できるかが違ってくるのだという。

わたしは内発的な欲求から「濁黒」を書いてきた。わたしが新しく生まれ変わるための処方箋が、まさしく「濁黒」だったといえる。

*

駒木田鶴子氏から、『詩と思想 詩人集2018』を頂戴した。かなり厚く、秋の夜長に少しずつ読むのに適している。飴玉をなめるように味読したい。

